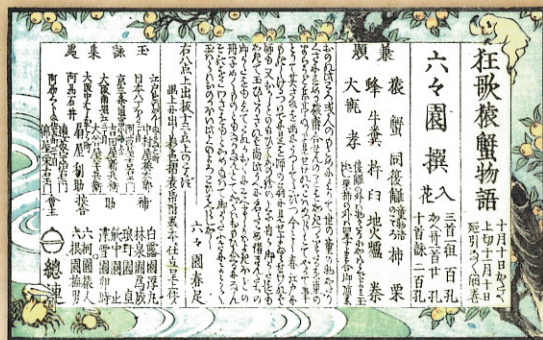


第73回
企画展

藍商と化政文化

春足文書繙叶ば



期間
令和7年

8月5日(火) → 10月26日(日)

開館時間 午前9時30分～午後5時

入場
無料

場所
徳島県立文書館
2階展示室

休館日
毎週月曜日・毎月第3木曜日
※月曜日が祝日の場合その翌日
※お盆期間中の8月12日〔火〕は開館

関連行事

展示解説 8月24日〔日〕、9月20日〔土〕

担当職員によるやさしい展示解説です

展示講演会 10月13日〔月・祝〕

「ホームページ狂歌文書館について」

講師 佐藤 武・立石 恵嗣・遠藤 雅義 氏
いずれも午後1時30分～午後3時
会場／文書館 2階 講座室・展示室

石井町連携行事

① 文化財ウォーキング2025
「春足ゆかりの地を訪ねて」

期間 11月29日〔土〕9時～12時
場所 石井町内

② 文化財展示
「石井の藍商と江戸文化」

期間 12月4日〔木〕～17日〔水〕
場所 石井町中央公民館 ギャラリー・会議室

③ 講演会「阿波藍商と江戸文化」

期間 12月13日〔土〕13時30分～16時
場所 石井町中央公民館
講師 佐藤 武・立石 恵嗣・遠藤 雅義 氏
問い合わせ先 石井町中央公民館



文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山
TEL.088-668-3700 / FAX.088-668-7199
<https://archive.bunmori.tokushima.jp>



ごあいさつ

第七十三回企画展では、藍商を営む一方、狂歌や国学などの分野で文化人として活動した遠藤春足を取り上げることとなりました。

阿波藍が隆盛を極めた十九世紀前半は、江戸を中心とした町人文化である化政文化が花開いた時代です。現在の名西郡石井町に拠点を置いた遠藤家五代目の春足は、家業のため江戸に下った際に当代一流の文化人と交流し、江戸の石川雅望（宿屋飯盛）に狂歌、和歌山の本居大平（宣長の養子）に国学を学びました。

本企画展では、春足が石川雅望及び本居大平をはじめ、平田篤胤、谷文晁ら多くの文化人と交流して育んだ文化的側面に焦点を当てます。また、春足の文化活動や藍商としての遠藤家に打撃となった「文政の江戸大火」を御紹介します。春足が交流した文化人の中には、現在放送中の大河ドラマ『べらぼう〜蔦重栄華之夢断〜』、高校日本史の教科書に登場する人物もいます。春足が残した資料を繙ひもといていただき、江戸時代後期の町人文化の豊かさと奥深さを御堪能ください。

文書館では、遠藤家資料の所有者である遠藤雅義氏から千点を超える古文書を寄託していただき、本企画展の開催にあたっては寄託以外の資料も提供していただきました。四国大学からは、須藤茂樹教授に仲介していただき、同大学が撮影された遠藤家資料の写真を提供していただきました。また、春足について研究されてきた佐藤武氏・立石恵嗣氏に、本企画展に向けての御指導をいただきました。御協力・御指導くださった皆様に、感謝申し上げます。なお、遠藤氏のホームページ「狂歌文書館」には、本企画展で紹介しきれない資料が掲載されています。また、石井町では本企画展と連携した行事を計画されていますので、併せてお楽しみくだされば、幸いです。

令和七年八月五日

徳島県立文書館 館長

山田 正之

ふゆごも はるたり ひもと
冬籠り春足文書繙けば
 (遠藤家文書を読む楽しさ)

遠藤家文書を読む楽しさを一言で言うならば、「冬籠り春足文書繙けば笑ひ万載狂歌書の山」(抜六)という

狂歌に尽きる。歌意は「長い間冬籠もりをしていた(休眠状態にあった)遠藤家文書を繙いてみると、中身は笑い満(万)載の狂歌書(狂歌に関する書)の山であった」というもの。

普通、古文書といえ、お役所からのお達し、お役所への訴え、商家の大福帳・商取引の控え、庄屋の日記・記録(控)等、ほとんどが実用的な目的をもつて書かれたものである。ところが遠藤家文書はこれを収集・保存したと思われる五代目当主・遠藤宇治右衛門(春足)が藍商であったにも関わらず、そういう実用的文書はほとんどなく、それとは縁遠い文芸に偏っているのである。

その内容をおおざっぱに分類すれば次の三つとなるだろう。

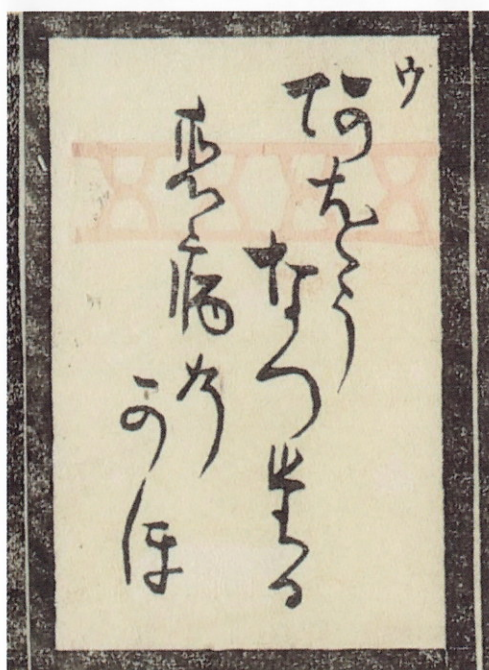
まず一つめは狂歌関係。中でも春足が師事した石川雅望(宿屋飯盛)の書き物が数量的にも内容的にも注目される。また独特の筆跡を眺めるだけでも楽しい。狂歌そのものについては春足はもとよりその結社「六々園」の人々、六樹園(飯盛)及びその結社

「五側」の人々が詠んだ膨大な狂歌が軸物、書冊、短冊、書き物、摺り物等の形で残っており、当時狂歌がいかにもてはやされたかが実感できる。

二つめは国学関係。これも春足が師事した本居大平(本居宣長の養継子)の書き物が注目される。さらに同じ門に学んだ「学友」達との情報交換・交流を示す書簡類も見逃せない。同じ和歌の流れを汲みながら本流(メイシカルチャー)としての和歌と傍流(サブカルチャー)としての狂歌の微妙な力関係をもうかがわせるものが含まれる。

三つめは春足と弟の画家・昂美(萃雅)が収集したと思われる作品群。この中には一時代前の本居宣長自画像自賛肖像画・書き物、当時の流行作家であった山東京伝、滝沢馬琴、十返舎一九、漢詩人・書家としても一流であった亀田鵬斎、市川米庵、菊池五山、絵画では酒井抱一、野呂介石、魚屋北溪、岳亭春信、版元では鳶屋重三郎、西村屋与八等の書簡・作品等を見ることが出来る。

遠藤家文書は阿波という地方にありながら江戸後期文芸の、さながら博物館と言っても過言ではない。



▲雲多楼鼻垂(遠藤春足)狂歌カルタ読み札と取り札

藍が育んだ 阿波の文化

江戸時代、木綿の普及にともなう染料である藍の需要が急速に高まる。その生産の中心となったのが吉野川中下流域の村々で、江戸時代中期には質量共に他地域を圧倒する一大産地へと成長していた。断片的に残されている統計資料によれば、元文五(二七四〇)年に約三千町歩であった阿波国内の葉藍の作付け面積は六十年後の寛政十二(一八〇〇)年には六、五〇二町余と倍増し、藍玉の生産量も文政元(一八一八)年には江戸時代の頂点に達する。春足の生きた時代は阿波藍の全盛期とほぼ重なっている。

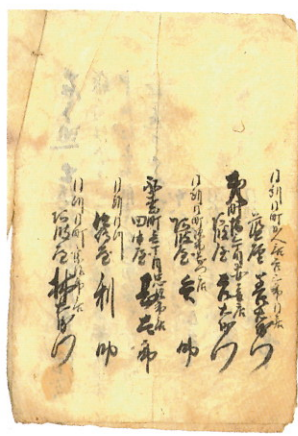
現在の石井町は藍作地帯の中心部に位置している。例えば、特に大規模な藍商が進出していたのが江戸・関東市場であるが、文化元(一八〇四)年段階の関東売藍商四十八名のうち八名が石井町域の藍商であった(遠藤家もその一人)。また、明和の藩政改革を主導した高畠村組頭庄屋小川八十左衛門や、天保の藩政改革で活躍し、勤王派の保護者としても知られる東覚田村組頭庄屋志摩利右衛

門も石井町域の藍商である。

藍玉の領外移出によって徳島藩領内に流入した膨大な貨幣は経済を刺激し、社会変動をもたらしていた。また、豊かな経済力を持ち、江戸や京大坂など各地に営業拠点を有するが故に多彩な人士との交流もあった大藍商の中には、高い教養や多彩な趣味を持った者が多くいたことは想像に難くない。しかし、志摩利右衛門などの一部の例外を除けばその実態はほとんどわかっていない。その意味でも、藍商としての生業を営みながら狂歌や国学、絵画などにいそしんだ遠藤家は貴重な事例といえる。



▲藍玉屋名前帳表紙



▲藍玉屋名前帳阿波屋吉右衛門

遠藤春足 はるたり

遠藤春足(天明二(一七八二)年〜天保五(一八三四)年)の通称宇治右衛門、関東藍商としては阿波屋吉右衛門(祖父の甥の名)、狂名に、雲多楼鼻垂、紀拔足、六々園春足がある。

阿波国内で藍作の最も盛んであった地域の一つである石井村の藍商遠藤家の五代目として生まれた。家伝によれば、家祖は遠藤安芸守利包と称し、戦国期に美濃から阿波へ入って石井村に居を構えたとされる。代々宇治右衛門を名乗り、早くから関東売藍商で、享和三(一八〇三)年に関東売藍商の売場株が設定された際に阿波屋吉右衛門の名で含まれ、江戸本八丁堀三丁目安兵衛店に店を構え蛇の目の俵印を使用していたことが知られている。近くの南八丁堀には徳島藩の中屋敷が置かれ、舟運による物資輸送に絶好の場所であった。また、同じく阿波屋吉右衛門の名で甲州街道の宿場町である八王子八日市宿に拠点があり、桑都と呼ばれ絹織物業が古くから盛んな周辺地域の商圏を握っていた可能性がある。文政十二(一八二九)年の江戸大火で八丁堀の江戸店が焼けたことが「六々園漫録」に記載されており、大きな損失を蒙ったことが窺われる。

が窺われる。

春足は、寛政四(一七九二)年十一歳の時に両親を相次いで亡くし、祖父治兵衛の後見のもと家業を守り、寛政十二(一八〇〇)年に献金によって郡付浪人(夫役免除・苗字帯刀)となり家業も盛んであった。二十の頃和歌を詠もうとして和書を読み始め、本居宣長の書に触れて本居大平の門をたたく。文化七(一八二〇)年石川雅望入門。この後雅望と盛んに書簡をやり取りして、狂歌集などへ入集するようになると、春足を中心に阿波・淡路でも同好の士が集まり始める。文化十(一八一三)年春日社に阿淡三十六名の狂歌額を奉納するにあたり六々連という社中を作り、この後主宰する。著作に『白癡物語』(文政十一年)、『猿蟹ものがたり』(文政十三年)、『難後言』(天保三年)などがある。

石井町を本拠とする関東売藍商の主人として四、五年に一度江戸本八丁堀の支店に通いながら、国学・狂歌という文化の世界で大きな足跡を残した。



▲『狂歌阿淡百人一首』六々園
(遠藤)春足画像

狂歌の師 石川雅望

石川雅望（宝暦三（一七五三）年～文政十三（一八三〇）年）、号に六樹園、五老山人、蛾術齋、狂名に宿屋飯盛などがある。雅望は浮世絵師の石川豊信の五男。江戸小伝馬町で旅宿屋を営む家に生まれた。狂名は家業である宿屋に由来する。

宿屋飯盛の名がはじめて狂歌集にみえるのは、天明五（一七八五）年刊行『徳和歌後万載集』である。同書の編者は狂歌の師であった大田南畝（よしののあから）で、同二年に南畝へ贈った狂歌などが入集している。

狂歌の最盛期・天明狂歌の時代に台頭し、狂歌四天王の一人にも数えられたが、寛政三（一七九二）年、家業に関する冤罪によって、狂歌界から退くことになる。狂歌界に復帰するまでの間、雅望は国学に傾倒。これが雅望の代表的な著作『源注余滴』『雅言集覧』の執筆へとつながった。

雅望は文化五（一八〇八）年に狂歌

グループ「五側」を結成。その後、鹿都部真顔と狂歌界を二分する存在となる。遠藤春足が雅望に弟子入りしたのは文化七年、雅望の狂歌界復帰から二年後のことである。春足は、

国学の師である本居大平に『雅言集覧』序文執筆を依頼するなど雅望の大著刊行に深く携わっている。計画から十五年の時を経て、文政九（一八二六）年に刊行された『雅言集覧』。しかし、同十二年の文政の大火によって草稿を自宅と共に焼失。『源注余滴』の草稿も失った。『六々園漫録』中の「石河雅望ノ伝」によれば、大火後は「枕をのみ友」とする状態だったといい、火事の翌年、七十八歳でその生涯を遂げた。



▲石川雅望肖像画

国学の師 本居大平

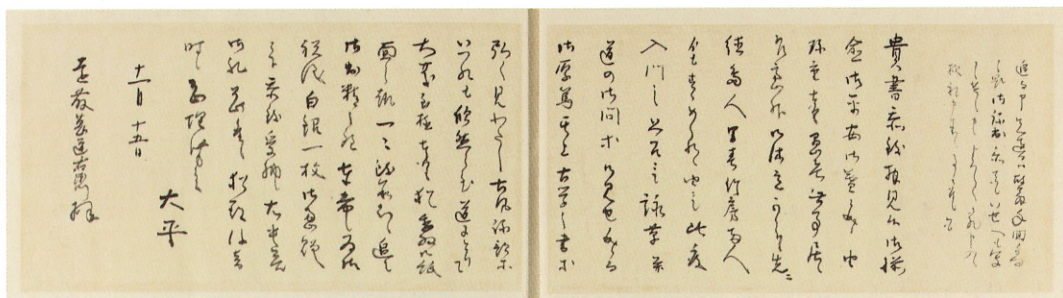
本居大平（宝暦六（一七五六）年～天保四（一八三三）年）、号は藤垣内。伊勢国飯高郡松坂の商家に生まれ、父である稲掛棟隆は本居宣長の門人であった。

明和五（一七六八）年に十三歳で鈴屋翁（宣長）に入門、鈴屋翁らと諸国を巡り、様々な紀行文を書いた。寛政十一（一七九九）年、四十四歳で宣長の養子に入る。宣長の実子である春庭の失明後は本居家の家督を継ぎ、和歌山藩で侍講などをつとめた。婿養子は本居内遠。著書に古道論『古学要』や歌集『稻葉集』などがある。

大平は宣長の学問を祖述し、門人たちへ講義・歌会・書簡での指導を実施、門下生は全国で千人を超え、そのうち阿波国には全体の六パーセントにあたる五十八名がいた。

春足の随筆によると、大平が和歌山へ転居した文化六（一八〇九）年ごろ名簿を送り、大平に入門。文政十三（一八三〇）年には、和歌山にいる大平を訪問し、長

年の熱い想いを詠んだ長歌・反歌を贈った。



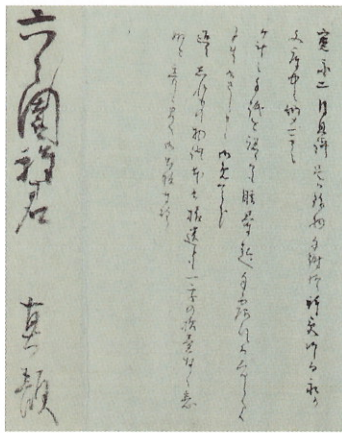
▲本居大平春足入門承諾の書簡(手鑑1)

遠藤春足を めぐる人々

遠藤家には多くの書簡が残されており、当時の人々と遠藤春足とのつながりを感じることができる。中には各界の「大物」の名も見ることができ、大変貴重である。ここでは、春足に宛てて書いた三名の書簡について紹介する。個人の略歴などは『国史大辞典』から引用した。

【鹿都部真顔】 しかつべのまがお もとのちかあみ

江戸時代の町人狂歌師。元木網の門下。天明期の狂歌四天王にも数えられた実力派で、四方赤良（大田南畝）の退隠後は狂歌界の中心の座を占めたという。文政十二（一八二九）年没。享年七十七。



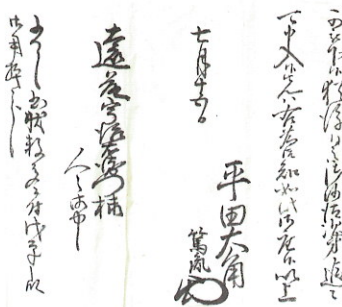
▲鹿都部真顔書簡

真顔の書簡には近況報告や、中国の笑話集である『笑林広記』を苦勞して手に入れた話などが書かれている。自身の婿が亡くなった際に「追福仏事」や「家督相続」などに追われ、心労から体調を崩している。このような悩みや苦勞を打ち明けられる関係であつたことがうかがえる。

【平田篤胤】 あつたね

江戸時代後期の国学者。通称は大角。秋田藩大番組頭の大和田家の生まれ。備前松山（現岡山県）藩士の平田家の養子となるが、文政六（一八二三）年には松山藩を辞し、独学によつて国学者となる。門人は五百人以上にものぼつたという。天保十四（一八四三）年没。享年六十八。

写真の書簡は、最後に「尚々書状数多付、代筆之処御用捨被下候」とあるため、自筆ではないと考えられる。署



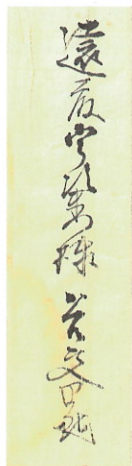
▲平田篤胤書簡

名と花押があるが、これらも本人の手によるものかは不明。内容は「月俸・格式等結構被仰付難有仕合奉存候」と、篤胤が尾張徳川家から好待遇で取り立ててもらった旨を知らせるものである。

【谷文晁】 ぶんちやう

江戸時代後期の画家。十歳の頃から狩野派の手ほどきを受ける。田安家に仕出し、寛政四（一七九二）年には松平定信の海岸防備視察に随伴し、風景の写生を担当した。あらゆる画法を思いのままに扱い、健筆をふるつた。天保十一（一八四〇）年没。享年七十八。

文晁の書簡には、「屏風吉双」「横物（横に長く書かれた書画）」などの記載とともに、「差上候」「御受取被成」「御申越」などがあるため、春足が文晁の作品を所望し、直接やり取りをしていたことがわかる。また、「親類其外弟子共大勢類焼扱々混雑仕候」とあり、身近に大火の影響があつたことを伝えている。

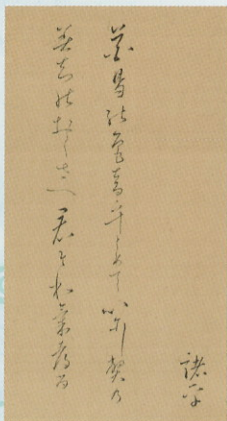


▲谷文晁書簡

加納諸平と春足

もろひら

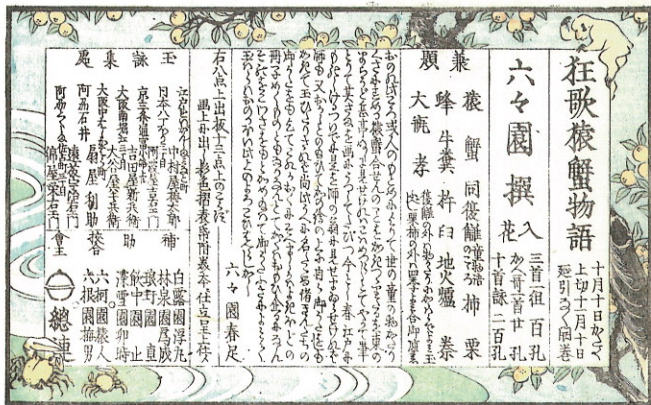
江戸時代末期ごろの歌人で国学者として知られる加納諸平は、文化三（一八〇六）年遠江国浜名郡で国学者・夏目鸕鷹の長子として生まれる。文政六（一八二三）年和歌山藩医師・加納伊竹の養子となり、医学を学ぶ傍ら、大平から国学を学ぶ。遠藤家には諸平からの書簡が何通も残されているが、春足と諸平の交流がいかんして始まったのかははっきりしない。諸平の書簡からは、互いに歌や書き物を送り、感想なども書き送っていたことがわかる。諸平は自らが編さんする『類題鯁玉集』へ和歌を寄せるよう春足を促すなど、和歌創作を何度も勧めている。諸平の和文章への思いは非常に強く、他者の文章への批判も見られる反面、自分の文章は拙いと恥じる所など、諸平の文面は率直な表現に溢れ、春足への信頼感も感じられる。こういった間柄もあり、春足没後に描かれた肖像画に諸平は讃を寄せ、その文人としての生涯を称えた。



▲春足肖像画の諸平讃

『猿蟹ものがたり』の出版

本を出版し、作者として著作を広く世に問うてその名を残すことは、文化人の憧れである。特に化政期は出版によってその文化活動がいち早く全国に展開するようになった時期であり、遠藤春足は、文政八（一八二五）年著作の笑話集である『白癡物語』を刊行した。文政十一年には江戸日本橋馬喰町の永寿堂西村屋与八が再版した



▲『狂歌猿蟹物語』集歌チラシ

が、文政十二年の江戸大火事で版木を焼いたという。その後書簡から西村屋与八の元で、さらに再版を重ねたことがわかつている。

このような、出版の成功を受けて『猿蟹ものがたり』の出版を少なくとも文政十一年には企画し始めた。全国の人からの狂歌を掲載するために作成した集歌チラシの口上によれば「人の求めによって童話の猿蟹合戦を文字に直したものを、岳亭春信に見せると早速物語の場面を挿し絵に書いてもらった。さらに師である石川雅望にその絵を見せると、絵の上に狂歌を書いていただいた。さらに全国の名だたる狂歌師の狂歌を掲載することができれば、とこの企画を行った」とある。狂歌は江戸霊岸島湊町中村屋梅太郎（雅望



▲『猿蟹ものがたり』版木（千里亭扇屋利助版）

の孫）、江戸本八丁堀阿波屋吉右衛門（遠藤家江戸支店）、京三条通吉田屋新兵衛、大阪南堀江大谷屋半兵衛、大阪中橋瓦町扇屋利助（大阪の版元）、阿州石井遠藤宇治右衛門（遠藤家本家）、阿州佐古綿屋栄右衛門の七人によって集められた。このチラシの鈴印は、六々園春足を中心とした総連の印だと思われる。

狂歌は全国の二百人から寄せられたというが、文政十二年三月の江戸大火で、江戸で集められた分を全て焼いてしまったという。そのため、実際に掲載された狂歌は江戸の人の歌も含まれてはいたが、わずか三十四首と少なかった。

このような経過により、『猿蟹ものがたり』は江戸の大火から一年後、文

化十三年六月に大阪の版元千里亭扇屋利助の手によって出版された。出版後に利助から春足に送られた、版木制作から三百冊分の仕立てに至るまで銀三百四十九匁ほどの請求書が残されている。その内訳には版木の内、二枚を色板とする為の代金や彫刻の技術料まで書かれており、当時の出版事情が窺えて興味深い。扇屋利助による版木一式は、現在も全て残されている。

さらに『白癡物語』の版元である江戸日本橋西村屋与八からの天保四（一八三三）年の書簡によれば、『猿蟹ものがたり』一五〇部を再版する提案が行われており、江戸でも再版された可能性が高い。こうした書簡のやり取りから、春足の著書は意外と需要が高かったように思われる。

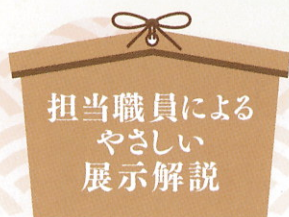


▲『猿蟹ものがたり』表紙及び本文

展 示 資 料 一 覧

No.	表 題	年 代	資料番号
関東売藍商遠藤家と春足			
1	遠藤春足肖像画（渡辺廣輝画 加納諸平讃）	近世	遠藤家文書
2	「六々園」扁額（宿屋飯盛筆）	近世	遠藤家文書
3	「六々園由来」軸（石川雅望筆）	近世	遠藤家文書
4	「阿州狂歌衆一覧図」扇面	近世	遠藤家文書
5	戊寅秀歌書拔（六々園評点・添削）	（文政元年）	エン 200014
春足の二人の師 ～石川雅望・本居大平～			
6	春足宛て石川雅望の返書 春足へのはじめての返書（手鑑 2）	文化期	遠藤家文書
7	六樹園（石川雅望）肖像画（魚屋北溪画 六樹園讃）	近世	遠藤家文書
8	「阿波の名所づくし」書（六樹園（石川雅望）筆）	近世	遠藤家文書
9	六樹園（書簡・六々園号の件）	文化期	エン 200625
10	石河雅望ノ伝	天保 2 年	エン 200756
11	春足宛て本居大平の返書 春足入門の承諾（手鑑 1）	文化期	遠藤家文書
12	柿ノ本人麻呂を称える大平長歌と短歌	文化・文政期	遠藤家文書
13	藤ノ垣内大人をとふらひまらせける時によみて奉りける長歌并反歌	天保前期	エン 200427002
春足をめぐる人々			
14	鹿都部真顔書簡（手鑑 1）	近世	遠藤家文書
15	谷文晁（書簡・依頼された屏風の件）	（近世後期）	エン 200688
16	平田大角（篇胤）（書簡・古道学事御取立の儀先達て願書差し出しに付）	（近世後期）	エン 200642
17	三河万歳画讃（河村文鳳画、大田蜀山人筆狂歌）	近世	遠藤家文書
18	富士山（谷文晁画）	近世	遠藤家文書
19	吉野山（谷文晁画）	文化 9 年	遠藤家文書
20	嵐溪春景（鈴木芙蓉画）	文化 6 年	遠藤家文書
21	本居宣長肖像画（本居宣長讃）	近世	遠藤家文書
22	岡月（本居宣長筆）	近世	遠藤家文書
23	加納諸平（書簡・六樹翁の文章貸与依頼の件 他）	（文政 13 年）	エン 200589
本を出版する（猿蟹ものがたり）			
24	猿蟹ものがたり（刊本）	文政 13 年	エン 200396
25	狂歌猿蟹物語（集歌チラシ）	（文政 12 年）	エン 200916
26	覚（「猿蟹ものがたり」彫刻等請求書）	文政 12 年	エン 200652
27	猿蟹ものがたり（版木）	（文政 12 年）	エン 201004
28	桃太郎狂歌合（集歌チラシ）	（近世後期）	エン 200437
狂歌と遊郭			
29	吉原十二時（刊本）	（近世後期）	エン 200076
30	丙子六樹園月次兼題（吉原十二時集歌チラシ）	文化 13 年	エン 200919
31	文政二年の春大坂の新町に初めて桜を植けるを見てよめる長うた（遠藤春足筆）	文政 2 年	エン 200609
32	六々園春足狂歌（色紙 手鑑 1）	（近世）	遠藤家文書
文政の江戸大火			
33	（文政十二年）江戸焼失図	文政 12 年	西尾市岩瀬文庫
34	猿蟹もの語狂歌合（遠藤春足筆）	（近世後期）	エン 200483
35	西村与八（書簡・神田佐久間町より出火の件及白癡物語版木の件 他）	（近世後期）	エン 200626
36	清澄（書簡・「猿蟹物語」撰文の件及当春三月廿一日火災にて土蔵とも焼失に付 他）	（近世後期）	エン 200729
37	築地八丁堀日本橋南絵図全	安政 4 年	ニシノ 02451

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。



担当職員による
やさしい
展示解説

日時／ 8月24日(日)・9月20日(土)
展示講演会：10月13日(月)祝
各午後1時30分～午後3時
会場／ 徳島県立文書館
2階 講座室・展示室

第73回 企画展
藍商と化政文化
— 春足文書緋けば —

令和7年8月5日 発行

編集・発行 ● 徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山

電話 088-668-3700 / FAX 088-668-7199

印刷 ● (協) 徳島印刷センター

〒770-8056 徳島市問屋町165番地

電話 088-625-0135



ホームページ「狂歌文書館」

URL <https://www.harutaru.com/>

本企画展で紹介しきれなかった資料を多数掲載しています。

